九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「麒麟」論 : 人間内部の二つの力の争いをめぐって

吉, 美顯
九州大学大学院比較社会文化研究科

https://doi.org/10.15017/15969

出版情報：Comparatio. 2, pp.84-107, 1998-04-10. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

「麒麟」論

人間内部の二つの力の争いをめぐって

吉　美顯

第一作品集『刺青』の諸作の中で、特に注目すべきものは、「刺青」と「麒麟」の二編である。何故なら数えで二十四歳の谷崎の手になるこの二編には、やがて展開される長い作家活動の全体を支える不抜の基底を見ることができるからである。

いわば谷崎のあらゆる可能性の源泉がそこにあったと見られる。それを一言にして言えば、「美しきものの力」への讃仰である。「すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であつた。」という文章は、「刺青」の主題に違いない。ところが、「麒麟」の主題も同じ主題が展開されている。何故ならばそれは、「鱗衣霓裳をまとつた」毒婦南子夫人の「美」と偉大の前には聖人孔子の影も薄らがざるを得なかったという物語だからである。

では、「麒麟」に於ける「強者」としての「美」は、どのように展開されているのかを孔子と霊公と南子夫人の三角関係に注目しつつ述べていきたい。

「麒麟」は、明治四十三年十二月、雑誌『新思潮』の第四号に発表され、前号の「消息」欄に「谷崎は孔子を

材料とした戯曲を書いて満天下を聳動させる意気組である。」と予告されている。「麒麟」の舞台はつねに中国古代といえ、人の世を離れることができない。

「麒麟」においての「歴史上較著の事実」は、主に『史記』の記述にあるような、孔子が霊公の夫人南子と同乗し、のちに「吾未見好徳如色者也」と言って、衛を去ったという「事実」であり、そこに南子と孔子の対決という虚構を挿入することで、孔子が衛を去らねばならなかった「因縁」が明らかにされている。

「麒麟」という題目は、孔子をさしたものであろう。「麒麟」の主題は、「精神と肉体」の対立、「道徳と官能」の対立であり、後者が圧倒するという事実である。この小説に於ける孔子は「前者のシンボル」であり、南子は「後者を具現」したものである。

「刺青」が刺激的であるのに比較すると、たしかに「麒麟」は地味に、くすんでいる。江藤淳も「強烈な印象」がないと指摘している。しかし「麒麟」の中では「強烈な印象」はないかもしれないが、実質において谷崎の面目が充分に生かされている作品であると思われる。永井荷風は「麒麟」を「今日までに発表された氏の作品中殊に注目すべきもの」のひとつと言っている。

吉田精一も「麒麟」は「語彙の華麗さ」を感じることができると言っている。

> 眼につくのは、骨格たくましい、堂々たる構想であり、とくに豊かな語彙を縦横に駆使した、古典的なほど律格正しい文体がものを言う。まさに地ひびきがするかも知れないようなたくましい力がここにはあふれている。内容にふさわしい華麗で荘重な表現は谷崎以外の何者にも見られぬ「語の織物師」の特色を発揮した

ものである。[注一]

「麒麟」が中国の古典に取材していることは確かである。冒頭の題辞と結末にひかれた孔子のことばによって、谷崎が図書館に通って、勉強した「支那の物語」は、『論語』と『史記』であったことがすでに知られている。この作者の奔放にして豊かな空想力に驚かざるを得ない。なぜかというと谷崎の芸術的空想が「文学芸術の根源」になっているからである。

「早春雑感」（大正六）の中では、「一編の物語を形成し得るような整然とした一貫した連絡のある空想ではなく、漂渺として補足しがたい一種の音楽的情調」のようなものだと言っている。

この作者の芸術境に古典的格調の美の優れた素質のあることについて酒井森之介は、次のように述べている。

この作品は、その内容が明治末の新文化の風潮の中で旧套陣腐と化しつつあった孔子という存在をとりあげながら、誰しも思いつかなかった全く斬新な、趣向の芸術世界の人物に据えてしまった点と共に、その書き出しの文体が新時代の青年にはようやく過去のものとして鼻につき出していたに違いない漢文調から出て漢文臭を脱し、漢文古体のもつ蒼古簡勁で余韻に富む古典調の雅趣を生かし、一種清新な典雅で印象的な口語文を創出した点は、明治末期の小説界に異彩を放つもので、今日なお好短編というべきである。[注二]

注一　吉田精一『近代文学鑑賞講座　九　谷崎潤一郎』（角川書店、昭和三十四・十）

注二　酒井森之介「『麒麟』の意義」『明治大正文学研究』（明治二十六・四）

吉田精一は、「麒麟」の主題を次のように説明している。

この小説は孔子の生涯、もしくは孔子のその人を書くことを主題としてものではない。主人公は孔子でも、主題は精神と肉体、道徳と官能という人間内部の二つの力の争いであり、後者が前者を圧倒するという事実であり、この小説における孔子は前者のシンボルであり、南子は後者を具現したものである。[注三]

吉田が指摘しているように「精神・肉体」「道徳・官能」というふうに孔子と南子の対立の関係が拡がっていくのである。

背に刺青を負う前の娘は「臆病な心」、世上の道徳を顧慮して、自身にひそむ魔性の本質によっておそわれる意識をもっていたけれども、「麒麟」では、道徳意識ではなく、道徳そのものを体現する人物が具体的にたちあらわれてくる。そして場面は孔子の動きにそって展開するというかたちをとっているのである。

「麒麟」の展開は魯の国政に志をえず、弟子たちとともに、やむなく「伝道」の、しかし目的のない流浪の旅にのぼろうとする孔子の姿を描くところからはじまる。

全編の主題はいかにも孔子の伝道にありそうであるが、実は、歓楽を尽くす豪奢な生活の中で残酷な血の刺戟

注三　前掲書　注一に同じ

にまで酔い疲れた南子の変質的愛欲が、作者の狙いに他ならない。孔子と弟子たちは、旅をつづけていくのに「のどかな春の日」に照らされた衛にはいったが、「其の宮殿の奥で打ち鳴らす鐘の響は、猛獣の嘯くように国の四方へ轟」いた。

この鐘の響を聞いて、孔子は子路に「由や、お前にはあの鐘の音がどう聞こえる。」と聞く。

これに対して子路は次のように答える。

「あの鐘の音は、天に訴えるような果敢ない先生の調とも違い、天にうち任せたような自由な林類の歌とも違つて、天に背いた歓楽を讃える、恐ろしい意味を歌つて居ます。」

宮殿から響きわたった鐘の音は彼らにとっては、「天に背いた歓楽を讃える、恐ろしい意味」という響きであった。「われ魯を望まんと欲すれば」と歌った孔子の歌とは対照的である。孔子の歌は「天に訴えるような果敢ない」歌であった。はじめから孔子の心の中には悲しみが宿っているのである。「恐ろしい意味」という歌は、はたして何が含まれているのか。それは「美」を誇る南子夫人の驕慢を象徴するし、孔子の悲しみとは相俟っていくのである。

麒麟は聖人による「王者の道の現実を伝える吉兆であるが、一般的には何ごとによらず、すぐれた能力をもち、卓越した人物」を意味している。とすれば道徳の典型である孔子に対して、美と権化である南子夫人、人々から

「夫人の額は妲妃に似て居る。夫人の眼は褒姒に似て居る」といって驚嘆されるこの女性に関して遠藤祐[注四]は、「麒麟の語をになうにふさわしい」と述べている。

みずからのうちに絶対の価値を有するものは、ひとつの世界に両立しえないのが、古来からの宿命である。

「わたしは世の中の美色を求めて南子を得た。また四方の財宝を萃めて此の宮殿を造つた。此の上は天下に覇を唱えて、此の夫人と宮殿とにふさわしい権威を持ちたく思つて居る。

このように霊公は美貌の夫人と宮殿を得るようになって、これにふさわしい権威を得たいと思うのだが、それは聖人の手伝いがなければならない。霊公は聖人の力を借りたいと思っている。次のような文章をみれば、霊公の心理を知ることができるだろう。

「どうかして其の聖人を此処へ呼び入れて、天下を平げる術を授かりたいものじゃ。」

しかし大事なのは、「彼自身の言葉ではなくって、南子夫人の唇から洩れる言葉」であった。

注四　遠藤祐『谷崎潤一郎―小説の構造―』（明治書院、昭和六十二・九）

「妾は世の中の不思議と云う者に遇つて見たい。あの悲しい顔をした男が真の聖人なら、妾にいろいろの不思議を見せてくれるであろう。」

という夫人の望みであった。このような望みは存在するのであろうか。これは「不思議」への挑戦ということに違いない。このようなことできるのは、南子夫人が絶対美を持っている女性だからである。この南子夫人の「不思議」への挑戦は、「自己の肉体への絶対の自信」から成り立つものである。

「私は聖人から罪悪に打ち克つ道を教わつたが、まだ美しきものの力を防ぐ術を知らないから。」

この文章は、作者哀心の共感と関心を示す箇所であろう。またここでは「防ぐ術を知らない」ほど絶対的な美に隷属する至福の境地がうかがうことができる。隷属する霊公に反して、南子夫人は、驕慢な女性である。南子は霊公を下僕として得られるのは自分自身だけだと思っている。

あの孔丘と云う男は、何時の間にかあなたを妾の手から奪つて了つた。妾が昔からあなたを愛して居なかつたのに不思議はない。しかし、あなたが妾を愛さぬと云う法はありませぬ。

南子夫人は、自分こそ最高の「美」の顕現を持っていると思っているのである。南子夫人は、霊公を王者の理想にひきもどそうとする孔子に挑戦を試みる。

先生は何故いつまでも其のように、悲しい顔をして居られるのであろう。妾には悲しい顔は凡べて醜く見える。（中略）豊かな心にふさわしい、麗かな顔を持たねばなるまい。妾は今先生の顔の憂の雲を拂ひ、悩ましい影を拭つて上げる。

荒正人[注五]は南子夫人の顔の描写に対して、「自分の美貌にくわえる武器とするのは珍貴の沈香であり腸をも焼く各酒であり、奇獣の肉であつた。」と指摘している。

孔子をおとしいれようとする力はそれが「南の海の底の幾百年に旦る奇しき夢がこもつて」いようとも香なのであり、「碧光を放つて透き徹る碧瑶の杯に盛られた」、「人間の味わぬ天の歓楽を伝えた甘露の如く」であったとしてもそれは酒であり、いかに珍獣奇獣の絶美の味覚であろうと食肉以外のものではなかったのだ。つまりは精神的内的なものより物質的現在的逸楽がいっさいに先行しているのである。

衛の国においても、南子と孔子との対峙は、いずれ避けられぬなりゆきであった。王宮に迎え入れられた孔子は、賢明に南子を避けて霊公とのみ語るようにしていたけれども、この国にきて王妃たる自分に拝跪しないのは聖人として礼に反した行為ではないかという南子の論理に抗しきれず、ついにその宮殿に伺候する。

王宮に迎えいられた孔子に南子夫人は、香水と酒を勧める。

注五　荒正人『谷崎潤一郎研究』（八木書店、昭和四十・七）

七つの香爐を捧げて、聖人の周囲を取り繞いた。夫人は香箱を開いて、さまざまの香を一つ一つ香爐に投げた。七すじの重い煙は、金繍の帳を這つて静に上つた。或は黄に、或は紫に、或は白き壇香の煙には、南の海の底の、幾百年に互る奇しき夢がこもつて居た。十二種の鬱金香は、春の霞に育まれた芳草の精の、凝つたものであつた。大石口の澤中に棲む龍の涎を、練り固めた龍涎香の香、交州に生るる密香樹の根より造つた沈香の気は、人の心を、遠く甘い想像の国に誘う力があつた。しかし、聖人の顔の雲は深くなるばかりであつた。

夫人はにこやかに笑つて、「おお、先生の顔は漸く美しう輝いて来た。妾はいろいろの酒と杯とを持つて居る。（中略）夫人は、一つ一つ珍奇な杯に酒を酌むで、一行にすすめた。其の味わいの妙なる働きは、人々に正しきものの値を卑しみ、美しき者の値を愛ずる心を与えた。碧光を放つて透き徹る碧瑶の杯に盛られた酒は、人間の嘗て味わぬ天の歓楽を伝えた甘露の如くであつた。紙のように薄い青玉色の自暖の杯に、冷えたる酒を注ぐ時は、少頃にして沸々と熱し、悲しき人の腸をも焼いた。南海の鰕の頭を以て作つた鰕魚頭の杯は、怒れる如く紅き数尺の髭を伸ばして、浪の飛沫の玉のように金銀を鏤めて居た。しかし、聖人の眉の顰みは濃くなるばかりであつた。夫人はいよいよにこやかに笑つて、「先生の顔は、更に美しう輝いて来た。妾はいろいろの鳥の獣との肉を持つて居る。香の煙に魂の悩みを濯ぎ、酒の力に体の括りを弛めた人は、豊かな食物を舌に培わねばならぬ。（中略）夫人はまた其の皿の一つ一つを一行にすすめた。その中には玄豹の胎もあつた。丹穴の雛もあつた。昆山龍の脯、封獣の蟠もあつた。其の甘い肉の一片を口に御む時は、人の心に凡べての善と悪とを考える暇はなかつた。しかし、聖人の顔の雲は晴れなかつた。

この一節は「麒麟」のハイライトである。ここで注目すべきは孔子の「悲しい顔」と南子の「にこやかな顔」という表情の対比である。言い換えれば孔子の「悲しい顔」は徳であり、南子の「にこやかな顔」は色であるといっていいだろう。南子夫人は孔子の憂鬱な顔を拭ってあげるつもりで、香を、美酒を、勧める。が、孔子の顔は曇っているように深くなるのである。作者はたしかに意識して、徳のかなしみと美の笑みとを、対照させたのではないだろうか。ここからは、谷崎にとって美徳と美とが、決して相いれない価値として意識されていることがうかがえる。

「人の心に凡べての善と悪とを考える暇がなかつた。」ということは南子夫人の色に対しての非難であるだろう。南子が自身の宮殿に孔子を招待し、対面を果たした後では、状況はあきらかに変化をみせている。徳の力の南子に適わないことをはっきり意識した孔子は、衛を去ることになる。そのかわりに霊公が遠のいていた南子の許に戻ってくることになるからである。

では、孔子の悲しさと南子夫人のにこやかさの対決はどうなるのか。

此の世の憂と悶とを逃れることが出来る。妾は今先生の眼の前に、其の世界を見せて上げよう。」（中略）帳の彼方は庭に面する階であつた。階の下、芳草の青々と萌ゆる地の上に、暖な春の日に照らされて或は天を仰ぎ、或は地につくばい、躍りかかるような、闘うような、さまざまな形をした姿のものが、数知れず轉び合い、重なり合つて蠢いて居た。（中略）其れは半は此の国の厳しい法律を犯した為め、半は此の夫人の眼の刺激となるが為めに、酷刑を施さるる罪人の群であつた。（中略）其の光景を恍惚と眺め入る南子の顔

は、詩人の如く美しく、哲人の如く厳粛であつた。（中略）妾は今日も公と先生とを伴つて都の市中を通つて見たい。その罪人達を見たならば、先生も妾の心に逆う事はなさるまい。」こう云つた夫人の言葉には、人を壓し付けるような威力が潜むで居た。優しい眼つきをして、酷い言葉を述べるのが、此の夫人の常であつた。

この文章は荷風が「谷崎潤一郎の文学」（『三田文学』明治四十四・一）の中で指摘した谷崎文学の特色である「肉体上の惨忍」のもたらす戦慄に満ちた情景である。無惨な情景を見せることは、道徳に対する南子夫人の美しい強者の自己顕示の極致であった。

遠藤祐[注六]は、この場面について「南子の美の威容の前には、いかなる徳性を王道も無力であることを、決定的に意識したためであった。」説明する。とすると、これは孔子と南子とは敗北の関係で、ここでは南子に孔子が負けたということになる。しかしここでの「敗北」というのは、道徳を持っている孔子が色を持っている南子に征服されたのではなく、孔子は前と変わらない。つまり南子夫人から影響を受けなかったとも言える。孔子は前とは変わらなくて、南子夫人からも影響も受けなかったのであくまでも道徳家として生きられるのである。

不思議なのは、この場面をよく見たら、孔子についての話はない。「先生は妾の心に逆らう事はなさるまい」と言っているのをみたら、孔子は単なる「聞き手」としての役割である。これは南子の独壇場といってよいだろ

注六　前掲書。　注四に同じ。

う。

またここでは「刺青」の女のように驕慢なイメージが窺える。「刺青」の中で「肥料」という言葉がどんなに大事な役をしているかは明らかである。「肥料というのは、刺青師清吉が宿願の女性に見せた二幅の絵の題名である。「刺青」の「肥料」という絵を見せる場面と「麒麟」のこの場面は類似点を持っている。「刺青」の絵の中では次のような内容がある。

若い女が桜の幹へ身を倚せて、足下に累累と算を乱して斃れたる幾年の男の屍骸を見つめて居る。

このように「刺青」の美女と「麒麟」の南子は悪魔的な面を持っている。

「親方、私はもう今迄のような臆病な心を、さらりと捨ててしまいました。ーお前さんは真先に私の肥料になつたんだねえ。」

というふうに「刺青」の女性は晴れやかに言った。

男が女の肥料になるというのは、確かに谷崎の重要なテーマだと思われる。

このように悪魔的であり、驕慢な南子が霊公と衛の国の権力を持つようになれば、衛という国は「善と悪とを考える暇」がなくなるし、衛の国に徳がないと孔子がとどまることは、必然的に不可能になるのである。

孔子の道徳の典型は「麒麟」の冒頭から見られる。

時々車上の夫子が老顔を窃み視て、傷ましい放浪の師の身の上に涙を流した。

「傷ましい」、「悲しい顔」、「放浪の師の上」という言葉はやはり孔子の道徳の観念をよく現している。このようなことは谷崎文学の世界においてついに甘受せねばならない宿命かもしれない。

庭前の光景を眼にした時、それは孔子の徳の対決を超越して、犯しがたい壮厳さを帯びている。この光景を見せた南子の顔は、「詩人の如く美しく、哲人の如く厳粛であつた。」と描写されている。この時、彼女の容貌の現す美は、感性の域を越えて、絶対性を獲得したのだといっていい。

「麒麟」において南子の顔に現れたこのおごそかな美に、ならびたちうるものがあるのであろうか。もしあるとすれば、それは、「安らかな、屈托のない歌の声」、「林類老人の心境」、その「楽しみ」であるにちがいない。

子項は老人に聞く。老人はからから笑って、このように答える。

「わしの楽しみとするものは、世間の人が皆持つて居て、却つて憂として居る。幼い時に行を勤めず、長じて時を競わず、老いて妻子もなく、漸く死期が近づいて居る。それだから此のように楽しんで居る。」

また、子項はかさねて聞いた。老人の答えは、次のようなものであった。

「死と生とは、一度往つて一度返るのじゃ。此処で死ぬのは、彼処で生まれるのじゃ。わしは、生を求めて

齷齪するのは惑じゃと云う事を知つて居る。今死ぬるも昔生れたのと変わりはないと思つて居る。

そして老人は歌い始める。この老人は現世のいとなみの一切を、みずから相対化する境地に立つ。また、この老人こそ何ものにも拘らず、自由を確保しており、徳を越えた美と肩と並べることができるのではないか。読者から見れば、この部分は無用のエピソードだと思われるかもしれないが、作者にとっては、南子の輝く美の絶対性と対比させるために、必要だったのであろう。

次の文章は美の絶対性を持っている驕慢な南子が描かれている。

ああ、彼の聖人の徳も、あの夫人の暴虐には及ばぬと見える。今日からまた、あの夫人の言葉が此の衛の国の法律となるであろう。

平常の美貌とは異なる。光輝が感じさせる美、である。人々は天人の美貌を仰ぐとき、同時にそれを恃む驕慢、「暴虐」の所為の数々を思い浮かべずにはいられなかったに違いない。このような考え方を持っている人の中で一人は、いうまでもない霊公である。この「享楽人」は決定的に、南子の美の虜になる。

「あの聖人は、何と云う悲しい姿をして居るのだろう。あの夫人は何と云う驕つた風をしているだろう。しかし今日程夫人の顔の美しく見えた事はない。」

このように南子夫人の美しさと聖人の「悲しい姿」は対照的に映っている。この光景は南子夫人が聖人を自身の宮殿に招待した時と状況が変わらない。宮殿の場面に見られた聖人の顔は「聖人の顔の雲は深くなるばかりであった」「雲は晴れて」いなかった。これに反して南子の顔は「にこやかに」笑っていた。二人の関係から緊張感が感じられるし、美の壮厳が南子の顔に示現したのであった。

「麒麟」を手がかりとして見なくてはならないことは、孔子と南子とにはさまれた霊公の態度である。

霊公は南子に次のように言っている。

「私はお前を愛さぬと云うではない。今日から私は、夫が妻を愛するようにお前を愛しよう。今迄私は、奴隷が主に事えるように、人間が神を崇めるように、お前を愛して居た。私の国を捧げ、私の富を捧げ、私の民を捧げ、私の命を捧げてお前の歓を購う事が、私の今迄の仕事であつた。けれども聖人の言葉によつて、其れよりも貴い仕事のある事を知つた。今迄はお前の肉体の美しさが、私に取つて最上の力であつた。しかし、聖人の心の響は、お前の肉体よりも更に強い力を私に与えた。」

孔子の教えに接してからは、それが当初の予期と多少ちがい、急速にその徳目に感化されていく。聖人の話に目覚めさせられた霊公は、たちまち態度を改め、国政に意を用い、南子からの自立を試みようとするのである。ある日霊公は南子夫人に今引用した言葉のように言うようになる。これはあきらかに自己と南子夫人と対等の関係を表明した、いわば独立宣言である。このとき「怒れる夫人の顔に面」するようになる。しかし「怒れる夫人の顔」に相対することができた。ここで霊公と南子の対立は、同時に孔子と南子との対立の関係であると見ても

いいだろう。霊公という人物は孔子にまた、南子に動かされる立場になるのである。南子夫人が霊公に対して「強い方」ではないと評している。

霊公は「聖人の心の響き」と「肉体の美しさ」との間に挟まれて、迷っている。この迷いいつまでつづけるのか。

しかし「西暦紀元前四百九十三年」の春が終わりに近づくとともに、揺れていた彼の生の指針は、おのずから一方に傾いていく。道徳の享楽か、美の享楽か。

「西暦紀元前四百九十三年の春の某の日」の深更、ひそかに南子の〈閨〉の戸をあけて迎えいれた南の腕のなかに自身をみいだした時、霊公は南子夫人に言う。

「私はお前を憎むでいる。お前は恐ろしい女だ。お前は私を亡ぼす悪魔だ。しかし私はどうしても、お前から離れる事が出来ない。

そして霊公は自己を滅す悪魔の中に身を投げていくのである。南子夫人の前に全く無力を哀れな男性の姿がそこに見られた。そして、このような哀れな男を好んで描き続けることに即して、谷崎は作家として自己を確立して行った。ここに谷崎の世界の基本的性格の一面が見出せると言っていいだろう。

この文章から「哀れな」霊公が、南子の美しさに戻って来たことが分かる。

すべての男性の支配を求めてやまない南子の真と権威と栄耀を尽くした必死の術策のために霊公の魂は再び南子の虜となる。

熱い南子の抱擁に身を投じた時、彼は、孔子と出会う以前のおのれに戻ったのである。霊公に「お前から離れることが出来ない」といわせたもの、自身の破滅を恐れてもなお絆を断つことの不可能を悟らせた契機は、たんなる官能美ではなかった。

事実如上の哀れな人間が如何におびただしく描かれているのは、「刺青」の刺青師清吉、「人魚の嘆き」の孟世寿、「魔術師」の「私」等など。しかもそれは決して初期の作品に限らない。「卍」、「盲目物語」、「春琴抄」等後期に属する諸作にも、等しく美しきものの力の前に全く無力な、その意識で哀れな人間の姿は鮮やかに描かれている。

霊公は南子の美に魅せられて、ついに聖人孔子を見捨てた。このような霊公の態度について、高田端穂[注七]は、「恐ろしい人である」と表現している。南子の前に全く無力である霊公であったが、その無力故に、孔子に対しては驚くべき決断を下していく。哀れな人が一転して恐ろしい人になる例は、他の谷崎作品にも求められる。

「どうぞ私の望みをかなへ、お前の奴隷に使つておくれ。」―「魔術師」[注八]

大洋の水の底に、かくまで微妙な生き物の住む不思議な世界があるならば、私はむしろ人間よりも人魚の種

注七　高田端穂『日本近代作家の美意識』（明治書院、昭和六十二・二）

注八　『谷崎潤一郎全集第四巻』中「魔術師」（中央公論社、昭和四十二・二）

属に堕落したい。―「人魚の嘆き」[注九]

いずれも、哀れな人であるとともにいかにも恐ろしい人たちである。そしてこれらすべては作者谷崎の血縁者であったとも言えるだろう。何故ならば、これらの諸作はいずれも「美しきもの」の描写を主題としたものであり、そしてそのような力の描写を最後に支えるものこそ哀れな人の姿だったのである。

このように谷崎の心情と態度を最もよく伝えるのは「哀れな人」、「恐ろしき人」であると言っていいだろう。これは作家谷崎の感性美に対する絶対の誠実そのものの反映であると見られる。

霊公は美しい肉体を憎み恐れながらも、なお南子への惑溺に抗しきれず、歓楽にのめりこんでいく。「享楽人」霊公の資質の明瞭な顕現であると見ていいだろう。美しい強者を憎み恐れながらも霊公は、孔子とは対照的、谷崎の作中に身をおちつける場を、みいだすのである。

またこのように表現している霊子の声は「震えて」いた。しかし南子の眼は、「悪の誇に輝いて」いたという目つきであった。この文章から見てもわかるように南子は魔性を帯びている女性である。

要するに南子は、自分の魅力に誇りをもち、それが無視されることを怒り、自分の魅力に負けない男性を悲しませ、苦しめることに喜びを感じる女性である。このような女性と聖人の関係は、緊張感を読者に与える。

ところが、日夏耿之介は、「決して読者を魅了することが到底出来ない。」と言っている。

注九　『谷崎潤一郎全集第四巻』中「人魚の嘆き」（中央公論社、昭和四十二・二）

南子夫人が挙描の描写に至っては、耽美的主観の立ちこめる現実相の危ない足どりが読む人の受けとる印象を稀薄ならしめ、現実の威力を以てしても、幻想の権威を以てしても、その何れを以てしても、決して読者を魅了することが到底出来ない。[注十]

また吉田精一も、「麒麟」は「何か足りない」と非難している。

作者は善と悪、徳と美との対立をねらっているが、そして外面的にはその限りで成功しているように見えるが、内面に立ち入って見ると、甚だもの足りないということになる。聖人の理想を邪魔するものは「悪」と見るなら救われるとしても、その思想の単純さは履えず、とくに「悪」と「官能的誘惑」とを同一視していて点は、作者がまだ封建的倫理観からぬけ切っていないからだ。[注十一]

しかしワイルドの場合は、「悪」に対して倫理的、心理的な深い解釈をつけることより逆説的に理解している。

注十　日夏耿之介『谷崎文学』（朝日新聞社、昭和二十五・三）

注十一　前掲書。注一に同じ。

悪とは善良なる人々が、他人の奇妙なる魅力を説明せんとして発明したる神話なり。人間を善と悪とに分かつは愚かなことだ。人間は魅力があるか、退屈なのかである。[注十二]

南子が「悪」とすれば、それは魅力があるからで、それも善良な人々には理解しにくい「奇妙な魅力」がある かもしれない。「刺青」の娘にしても同じである。彼女に「悪」のめばえがあり、南子に「悪」の完成した姿態があるといえないこともあるまい。このような意味でなら「悪の讃美」ということが堂々と主張できるかも知れない。少しも魅力がそれも奇妙な魅力があるのならば、それだけで価値があるというものである。

「夫人の眼は悪の誇に輝いて居た。」という文章に対して、日夏は、「無思慮な、おおざっぱな、大学青年臭の生くさい一行である。」というふうに指摘しているし、作品中の南子に関する描写についても「耽美的主観による幻想や作品上の現実化にいかに筆が尽くされていても魅力ない」と述べている。

「刺青」「麒麟」に始まり、「卍」に到る谷崎の最も盛な活動期は、この「悪の誇の輝く」愛欲の一筋道に他ならなかった。この悪魔的変質的愛欲も後には「精緻なものになる」が、「刺青」などでその素材のもつ変態性で随分得ているのであって、初期からさまで病的ではなかった。

孔子は衛の国を去りながら、次のような話をする。

注十二　ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』（福田恆存訳、新潮文庫、昭和三十七・四）

吾未見好徳如好色者也（われいまだとくをこのむことといろをこのむがごとくなるものをみざるなり）

衛の国を去る孔子のこの言葉について荒正人[注十三]は、「蛇足にすぎない」と言っている。

しかし上の文章の中で「徳を好む者」と「色を好む者」とは、「一人の霊公の中に存在する二つの人格である」と林四郎[注十四]は言っている。一般的真理でいえば、徳は所詮、色にはかなわないものだというのである。

また、この文章に対しては色々意見があるが、ここでは孔子が南子夫人に敗北の意味として言っているとは思わない。

やはり「色」と「徳」とが互いに相反しながら、しかも常に共に人間にとっての最大関心事であることを心からふしぎに思う情がある。谷崎は、このような緊張感を考えたかもしれない。そうしたら「色」と「徳」を相反している世の中であるのになぜ谷崎が孔子を登場させたのかに対して、考えねばならないと思われる。

それは男にとって女の魅力は到底あらがいがたいものである。しかも、女色と相容いれない徳の追求を止めることも、また人間にとって、できないので孔子が現れたのではないだろうか。またここでは人間一般の中に同時共存的あるいは随時交替的にふたつの本性、「麒麟」の中では色と徳であろうが、このような認識が生まれるの

注十三　前掲書。注五に同じ。

注十四　荒正人『谷崎潤一郎研究』（八木書店、昭和四十七・十一）の中に入っている小論文である。

である。これも谷崎のプロト・テーマのひとつに考えられる。また二重人格を持っている「享楽人」霊公は「色」と「徳」を得るために享楽しているのではないか。

「吾未見好徳如好色者也」というのはなげきの声であると同時に、「麒麟」においては、享楽人霊公にむけられた感嘆の声であったのではなかろうか。遠藤祐[注十五]は、「〈哀れな人〉霊公もまた、享楽に徹した一個の『麒麟』であったのではないか」と述べている。

南子の容色に溺れて、国政と人道を顧みない霊公を反映しているはずである。すべて夫人との〈歓楽〉をあがなうために犠牲に供し、夫人の一態度を気にする霊公は、まさに官能の奴隷にほかならず、その形象は現世享楽者のそれであるかに見える。

「麒麟」の冒頭と結尾の古典的格調の美は孔子までも風格のある美的存在としているが初期からこうした美への希求があったことを物語るものである。

南子夫人は、衛の霊公をめぐって、聖人孔子と対立する悪と善の権化としての役割の与えられた存在であるから、正に妖婦淫婦型の典型として最初から登場する。

この南子夫人の本質や性格を鮮明にするために、孔子と霊公の存在が明らかになって、妖婦的な美は男性としての弱さを天性とする霊公の前に強烈に発揮される。

霊公が「お前は私を亡ぼす悪魔だ」と言っているように、南子夫人の悪魔的な面が見られる。男性を服従させ

注十五　前掲書。注四に同じ。

る妖婦性を誇示した南子夫人は、権力を土台に美を誇っているに過ぎず、霊公は、南子の妖しい美と孔子の徳との間を揺れ動くだけである。

以上のように「麒麟」から展開されている主題は、「美しい者は強者であり、醜い者は弱者であつた。」のである。

妖艶な女である南子夫人に霊公は跪くようになる。霊公は「色」の南子夫人と「徳」の孔子の間で迷うが、結局は「色」の南子夫人に敗北する。霊公に対しての夫人は「強者」になる。しかし孔子は、南子夫人が徳の力に及ばないということを認識して、衛を離れるようになる。したがって、孔子は悪魔的な南子夫人に敗北していないと言える。孔子の場合は前とは、何も変わっていない。「徳」の孔子として生きられる。

谷崎が「麒麟」から論じようとしたのは、「刺青」とおなじように「女性美」であり、男性に対しての強者の「美」であった。

《テキスト及び主要参考文献》

『谷崎潤一郎全集第一巻』中「麒麟」（中央公論社、昭和五十六・五）
『谷崎潤一郎全集第四巻』中「魔術師」「人魚の嘆き」（中央公論社、昭和四十二・二）
吉田精一『近代文学鑑賞講座九　谷崎潤一郎』（角川書店、昭和三十四・十）
ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』（福田恆存訳、新潮文庫、昭和三十七・四）

荒正人『谷崎潤一郎研究』（八木書店、昭和四十・七）
遠藤祐『谷崎潤一郎―小説の構造―』（明治書院、昭和六十二・九）
日夏耿之介『谷崎文学』（朝日新聞社、昭和二十五・三）
高田端穂『日本近代作家の美意識』（明治書院、昭和六十二・二）

雑誌

酒井森之介「『麒麟』の意義」『明治大正文学研究』第五輯（明治二十六・四）